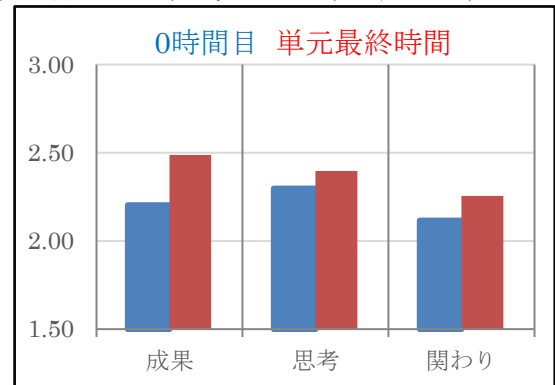
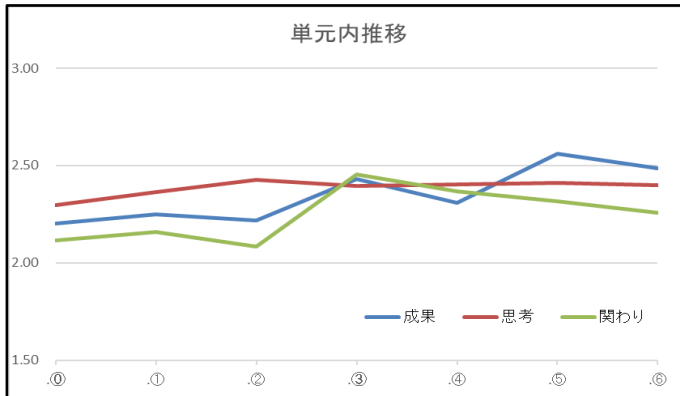


1 単元名 後ろにぐるん 後方支持回転

(器械運動・鉄棒運動)

2 児童の変容

(1) 情意面 (形成的授業評価をもとにした授業評価から) 男子13名 女子15名 計28名



- ・「成果」は単元前よりも単元最終時間の数値が高くなった。鉄棒運動に対する恐怖心が減ったことが大きいのではないと思われる。児童の実態として、つばめや布団干し、前回り下りは多くの児童が自力で行うことができる。そして器具がなくても、色んな技に挑戦していく児童がいる反面、鉄棒上で後ろに体を倒すことに不安を感じる児童、身体が鉄棒からマットに離れて落ちてしまう児童が見られた。どの子も安心して取り組めるようにするため、児童たち全員に補助の仕方を伝え、タオルや腰ベルト等の補助器具の使い方についても確認した。一人では未達成な児童が、友達による補助や助言、器具の使用によってボディイメージを養うことができた。このことが児童たちの成果の上昇につながったのではないかと考える。
- ・「思考」は単元前よりも単元最終時間の数値が高くなったが、グラフ全体を見ると大きな変化はない。単元前半では、上手な友達の手本を見てポイントを探したり、先生の悪い例と友達の良い例を比較したりする発問や活動を取り入れた。児童たちは、後方支持回転ができるようになるためにはどうするとよいのかを考えて学習プリントに自分の言葉でまとめた。単元中盤では、目標の技ができないときにどんな補助や器具が必要か、ステップ表の何を行うのかを考えて選択し、活動することができた。ポイントを見付け、比較し、選択して練習に取り組んだことが児童たちにとって良かったのではないかと考察する。
- ・「関わり」は単元前よりも単元最終時間の数値が高くなった。特に高い数値を記録したのは、技のポイントを知り、補助の仕方や器具の使い方を確認した3時間目である。逆上がりに対して苦手意識を持っていた児童たちが特に積極的に練習していたように感じた。単元のほとんどの時間を通して、身長は同質で技能の異質グループでの活動にしたことによって、お互いの良さや改善点について話し合いながら関わることができたのではないかと考える。

(2) 技能面

	①後ろ振り跳び (振りを3回して後ろへ跳ぶ) (鉄棒と同じ高さまで足が上がる)			②逆上がり		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	5	20	3	20	6	2
単元後	8	17	3	20	4	4

	③一の字逆上がり (鉄棒の支柱までに足がそろって逆上がりをする)			④連続逆上がり (リズムよく2回以上回る)		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	8	15	5	20	2	6
単元後	12	11	5	20	3	5

	⑤後方支持回転 (振りあり) (足の曲げあり)		
	できる	もう少し	できない
単元前	1 3	9	6
単元後	1 6	6	6

- ・単元前と比較してもう少しで達成できそうだった児童に成長が見られた。補助や器具の使用により身体感覚が付き、スモールステップ表によりレベルが上がるごとに補助や器具をなくしていくように設定した。結果としてできなかったことが何も使わなくともできるようになったと考えられる。
- ・まだ達成には満たない児童も補助や器具があればできてしまう児童が多い。補助や器具を少しずつなくしたり、緩めたりして何も使わなくともできるようにしていきたい。

(3) 思考面

問 後方支持回転ができるようになるために、どのような練習や取り組みが必要だと思いますか(しましたか)。(複数可)		
単元前		単元後
・勢いよく回る。	2 5	・勢いよくスイングをした。 1 3
・お腹から鉄棒を離さない。	1 2	・いつもお腹から鉄棒を離さないようにした。 1 0
・振り跳びのように振りを大きくする。	7	・回転し始めるときに、ももで鉄棒を包んだ。 1 2
・顎を開いて頭を遠くに倒して回る。	4	・腕の曲げ伸ばし。 8
・回る時に膝を曲げる。	2	・スイングの勢いが大きくなるようにした。 3
・ひじを伸ばしたままにする。	1	
・回る時に膝を伸ばす。	1	

- ・アンケートの回答から、技のポイントが明確になったように思える。自分の今の姿とお手本の友達の姿を比べて練習に取り組んだことで、自分で練習をするときに何を意識するのか、どうして成功したのか(失敗したのか)を振り返ることができるようになったからだと考える。

3 成果と課題

中学年のめざす姿

自分の課題を見付けたり、課題解決に取り組む内容を選んだりする中で、知識や考えたこと、気付いたことを伝え合うことができる児童

【成果】

- ・各ステップ表のめざす動きに対して、【補助器具(タオルや腰ベルト)と友達の補助→器具または補助のみ→一人で行う】というような流れを作ったところ、めざす動きのためにどんな練習をすればよいかわからなくなってしまう児童がいなかった。また、表の中身をさらに細分化したことによって、児童自身の取り組む内容が明確になったことが有効だったのではないかと考える。
- ・鉄棒のグループを設定する際に、上位の児童を各グループのリーダーに設定し、いつでも、どこでも、だれとでも学び合いができる学び方の素地をつくるために、もう少しで達成できる児童、一人では達成できない児童を背の順の男女混合のグループで構成した。グループ内でも友達の活動内容を把握していたり、アドバイスを活発に行ったりしている姿が見られた。学習のねらいに沿ってグループを構成する有用性を強く感じた。

【課題】

- ・タオルと友達の補助で学習を進めていたが学習の途中で補助ベルトを取り入れたところ、上位と中位の児童を含めた全員が物珍しさからベルトを使い出してしまった。体格が大きくタオルを掴んでいられない児童に使ってもらいたいという思いで使用したが、学習の初めの時間や取り入れる日に「どういうことに困っている人が使うのか」「使うことによって何が期待されるのか」を共通理解し、不公平感が出ないようにした上で取り入れるべきだった。
- ・学習が終わった時に、どこまで何ができたのか、できなかったのがはっきりするため、その日の内に次の学習のめあてが残せるような学習カードが用意できるとよいと感じた。
- ・体ならしで逆上がりでの感覚も大事だが、後方支持回転につながる後方片膝掛け回転などの体ならしをもう少し設定する必要がある。